

妻のぬくもり 蘭の紅

折笠智津子



妻のぬくもり
蘭の紅

折笠智津子

主婦の友社



妻のぬくもり 蘭の紅

定価一三〇〇円

昭和六十一年十二月二十日 第一刷発行
昭和六十二年五月十九日 第三刷発行

著 者 折笠智津子 （検印省略）

発行者 石川晴彦

発行所 ㊤株式会社 主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台二一九 郵便番号二〇一
振替 東京二八七五二七番
電話（編集）〇三―二九四―一二二（販売）〇三―二九四―一二三

印刷所 星野精版印刷株式会社

凸版印刷株式会社

© Chiruko Orizawa 1986 Printed in Japan
ISBN4-07-924780-X

もし落丁、乱丁、その他不良の品がありましたら、おとりかえいたします。
お近くの書店か、本社へお申してください。

妻のぬくもり蘭の紅
目次

はじめに

5

序章

アキが死んじゃう！ 9

春の章 [出合いの頃]

百合咲く頃 15

蝉時雨 21

白い思い出 25

爪 30

“恋”に就職します 35

鍵のペンダント 45

夏の章 [新婚時代]

十二月十日 快晴 49

「北へ行こう」 56

午後九時 61

源氏物語絵巻 68

螢文字 78

恋人のすすめ 84

秋の章「子供と共に」
冬航日記・美帆日記 91

五人目の家族 102

続・五人目の家族 108

フーちゃん音楽会 117

宇宙よ滅んで！ 123

冬の章「病魔」
バスポート 127

「あと二年で……」 135

いつぱいの花を 139

潰れたサンドイッチ 149

告げる 157

いのちの章[闘病の日々]

霧の中の約束 161

消えた童話 170

キッチン・ドリンカー 175

花吹雪 184

「オマケ」大好き 188

蘭の紅 195

“戦友” 202

明日をありがとう 207

家族の肖像 211

わがびと

222

装丁・亀海昌次

写真・中道順詩

はじめに

夫と子供二人。上が男、下が女の子。夫は会社員。新聞記者という職業は、不規則な時間など、普通のお勤めとは少々違いましたけれど……。子供達は、その頃、高校生と中学生で、勉強よりは遊びが好き。健康な甘えん坊。そして私は、お買物とおしゃれが好きで、お付き合ひ下手な、ちょっと世間知らずの主婦。

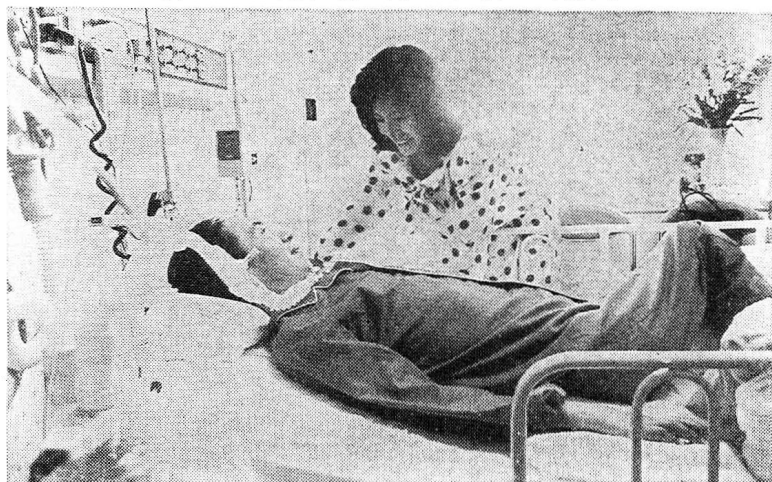
つまり、何処にでもある平均的な四人の家庭でした。

その平穏と温もりの生活が、いきなり嵐に包まれてしまったのは、昭和五十七年五月のことでした。

夫、美昭よしみが不治の難病に侵されていることを、専門医から告げられたのです。「筋萎縮性側索硬化症」。原因不明、治療法なし。死を待つばかりの奇病だといっています。

真っ暗闇に突き落とされたその日から、四年余になります。嵐の中、闇の中を、あえい

病院の夫の看病に通い出してから、4年余に。



で歩むような歲月でしたが、今私は、とても幸せです。

強がりに聞こえるかもしれませんが、精一杯の氣どりと思われることでしょう。確かに、病院へ夫の看病のために通う毎日など、尋常な家庭生活とは申せませんが、もしこのような悲嘆と困難がなければ、私は世間知らず、苦勞知らずの主婦のまま、単調な、陽だまりの中の人生を歩んだでしょう。そうした平凡な、当たり前の生活にこそ、真の幸福があるのかもしれませんが、それは人生の半面であることを知りました。

たくさんの人と出会い、たくさんのことと出会い、さまざまな涙を噛みしめ、さまざまな飲みも味わうことが出来ました。人生を素手で、肌で実感しながら、一日一日

を生きることが出来ました。

それに何よりも、病院へ行けば、笑顔の夫といつでも逢えるのです。待ちかねていたよ、と言ううれしそうな表情で迎えてもらうだけで、生き甲斐が、確かな手応えとして感じられるのです。

笑顔ばかりだけでなく、怒りもすれば、叱ってもくれます。人工呼吸器を着けるため気管切開していますので、声は出せませんが、唇の動きを見ながら「会話」を交すことも出来ます。楽しかった想い出、子供達について、あるいは死後のことも……。

夫婦がしみじみ語り合う、こんなに穏やかな時間にも恵まれました。

それはもちろん、辛いこともあります。口惜しい思いもします。悲しい涙も流します。でも私達よりも辛い毎日を送っている病人とその家族が、数えきれないほどいらっしやることを、身をもって知りました。私達は毎日逢って、互いに意志を通じ合えるだけでも、大変幸せなことなのです。やがてもしかすると、明日にも終わってしまう幸せだとわかっていても。

そんな来し方と、日々のありさまを、思い出すままに書き綴ってみました。拙い筆も顧みずに。

序章

海嘯も

激雨も

おとこの

遺書ならん

雪うさぎ

溶ける

生きねば

生きねばならぬ

美秋

アキが死んじやう！

頭の中が真っ赤になったり、真っ黒になったり、かと思えば、真っ白になってしまったりの、大変な非常事態が起きたのは、五十八年二月十三日のことでした。日曜日でした。ちょうど娘美帆みほの十五才のお誕生日でした。

目を覚まし、夫の寝ている階下の和室を覗いてみますと、驚いたことに失禁しておりました。

「まあ、どうしたの。駄目ねえ」。

すると、恥ずかしそうな笑みを浮かべましたが、当人は全く覚えていないとのこと。この時はすでに、失神状態、昏睡状態に陥っていたようです。

そうとは気付かず、「イモムシ、ゴロゴロ」と体を横にころがしながら着替えを済ませ、布団やシャツも新しいものに取り替えました。

「さ、お粥を作ってきますからね」と、そばを離れたのですが……。

おしぼりを持って、すぐに部屋に戻ってみますと、声をかけても返事がありません。顔が真っ青です。白目を出して、咽喉から奇妙な音が洩れています。「呼吸が出来ないのだ」と思いました。

アキは次第に胸の筋肉を侵され、いつか呼吸困難になることを予測しておりましたから、その時に備えて彼は、長男冬航^{ふゆき}と人工呼吸の練習をしていました。

咄嗟に、そのことを思い出し、「お兄ちゃん、起きて！ パバがおかしいのよ」。

冬航が口移しの人工呼吸を続け、その間に119番し、さらにアキと私の両方の肉親に電話をして急を知らせました。救急車を迎えるため美帆を外に出しましたが、アキは意識が戻る様子もなく、「おかしいなあ、お腹にばかり空気が入っちゃうんだ」と冬航。

正視してられないほど、苦しそうなアキ。ああ、もう駄目なのかしら、と思いました。

*

アキに、この「死の病い」の症状が現われはじめたのは、五十六年春頃のことです。指の震えにはじまり、やがて親指から次第に力を失い、腕がだるく、重くなってゆきました。

夏には、よく「肩がこる」と訴えるようになり、細いボールペンで字を書くことが困難

になってきました。小石なども遠くへ投げる事が出来ず、「おかしいなあ」と首を傾かたげておりました。

冬になる頃には、庭木の鋏も使えず、車のハンドルも回しきれなくなりました。ある日、電車の吊り皮を掴もうとして、そこまで腕が上がらず、とてもショックを受けた様子でした。暮れには、食事の時お箸が使いづらそうで、私が渡したお茶碗を取り落したりしました。

五十七年のお正月休みに、ある大学病院に行きましたが、四十肩・五十肩という診断でした。

でも、悪くなるばかりで、首も回らないほどになりました。やはりおかしいと、五月、北里大学病院に精密検査のため入院したところ、「筋萎縮性側索硬化症」とのことでした。家庭医学の本によると、この病気は筋肉を動かす神経系統が侵され、指、腕の脱力、さらに足に及んで歩行も不能になり、末期には舌の萎縮、嚥下えんげ（飲み下し）困難などを起こし、多くは発病後数年以内に死亡——と説明されていました。

「早ければ一年ほどで……」という先生のお話。このことは、私たち家族と会社が知ってからも、アキには告げずにおりました。

次第に不自由になる体をおして通勤を続けましたが、秋には息苦しく歩行も困難となって休職、家で床に就きました。

年が明けてからは、食事もほとんどすることが出来ず、話をするのも苦しそうです。「春になれば楽になるかなあ」と本人が申しておりますうちに、この二月十三日の出来事となったのでした。

*

到着した救急車の人は、一目見て切迫した容態とわかったようで、「北里へお願いします」という私の頼みに、「とても北里までは無理です。もちませんよ」。酸素吸入をほどこしながら、途中の休日診療所で紹介状を受け取り、至近の昭和大学病院へ急行しました。そこで二時間ほど救急処置を受けました。酸素を送り込む呼吸器が口に取り付けられ、点滴などとして、ようやく血圧も50から60、70まで上がり、「何とか動かせそうです」。

二人の医師が付き添って下さって、相模原市の北里大学病院に転送、ICU（集中治療室）に入りました。今思いますと、アキの命があの時が終わってしまったのは、全くの幸運でした。冬航が落ち着いて人工呼吸を出来たこともそうですが、何と申ししても、救急車の人達、休日診療所の先生、昭和大学の先生と看護婦さん達、さらに北里大学病院の救急スタッフの方々……と、すべての人が真剣勝負で対処して下さいったおかげです。初めて逢った、そして多分二度とお逢いすることのない方々ですが、“まごころ”という言葉と共にいつまでも胸に熱く蘇ってまいります。

「あ、子供達も朝から何も食べていないんだワ」と思った時は、すっかり冬の日が暮れて
おりました。